

勤務校で平和学を講じる際に必ず学生から問われるのは、「要するに平和学とは何か」ということである。最近「戦争を終わらせる、また、未然に防ぐために必要なことは何かを追求すること」が、平和学の核になるテーマだ」と説明することになっている。

実際には、平和研究の扱うトピックは多種多様であり、戦争にかかわる研究の割合が圧倒的に多いわけではない。さらに学際性が大きな特徴でもある平和研究は、既存の学問との違いが分かりにくいという面も持つ。それゆえに先のような疑問を持つ学生が少なくないわけであるが、その多様な発展を遂げた平和学の出発点こそが戦争の廃絶ということであったと思う。

それではなぜ、戦争の廃絶をめざしたのか。与えられた紙幅が足りないので多くを語ることはできないが、私自身の思考の出発点は「人が人を殺すということはどうしても止めなくてはいけない」ということだ。貧困や人権抑圧、環境破壊へと平和学の研究領域は拡大してきたが、そこに共

平和学と人間の安全保障研究

玉井秀樹

通するのは、人の手によって犠牲になる多くの人々がいるということであり、そのような人たちを何とかして救済、解放したいという思いである。

依然として武力紛争による殺戮の犠牲者は多いけれども、戦争さえなければ大量死を防ぐことができるという時代ではなくなってきた。3・11と福島原発で受けた衝撃のようにテクノロジーが人間を犠牲にする時代である。このような時にめざすべき「平和」を語る概念として「人間の安全保障」は有用性がたいへんに高いと考える。

国連開発計画が人間の安全保障を訴えてから20年近くもたっているが、本年（二〇一二年）九月に国連総会が人間の安全保障に関する決議を採択するなど、国際社会の中で浸透してきたのは最近のことだ。日本では二〇一一年に人間の安全保障学会が立ち上がったばかりである。平和学の学徒として「人間の安全保障」をどう受け止め展開していくのか、さらに研鑽を深めたいと思う。

（たまひでき／東洋哲学研究所委嘱研究員）